

かんぽスコープ

Vol.82

経営
時流

「小」が「大」を飲み込む。 知財戦略で、会社の舵をとる時代が来た。



消棒シリーズの商品を紹介する吉田氏。

特許や実用新案、商標、意匠など、知的財産(以下、知財)を成長の「種」に活用する機運が中小企業の間で高まっています。知財を盾にした市場防衛、知財をテコにした新規事業開発など、「知財戦略」次第で、小さな企業でも大企業と五分に渡り合えるのです。そこで今回は、知財戦略の一步進んだ事例を紹介。中小企業が大企業を巻き込んで事業連携を成功させた株式会社ワイピーシステムの吉田英夫社長に、取り組みの詳細を伺いました。

受諾研究を積極化し、 200超の知財を所有。

3種類のめっき加工技術だけでもつつ小さな町工場として創業した同社。今や世界シェア1位を誇る低公害のめっき法「低温黒色クロム処理」の発明が転機となり、同社は知財の蓄積を推進。さらに、公的機関や大企業からの受託研究に積極的に取り組み、取得した特許は約170件。現在では、商標なども含めれば200件を超える知財を所有する。

「受諾研究のひとつで、部材や技法だけでなく、初の完成品として製品化したのが二酸化炭素洗浄機。本来はモールド(型)などの洗浄に用いられるものですが、これが、のちの新規事業につながりました」



消す、切る、割るの3機能を備えた「消棒RESCUE」。



経済産業省で行われた新連携の認定式に集合した各企業の代表者。右から4人目が吉田氏。

株式会社ワイピーシステム 〒359-0026 埼玉県所沢市牛沼607-6 ☎04-2968-5700 <http://www.yp-system.co.jp/>

「この発展を牽引したのが吉田氏。「会社を創業した頃は、なぜめっきが金属に付着するのかすら分からなかった」と打ち明けるが、「自分がこのままでは会社はダメになる」と徹底的にめっきを勉強。「やがてはめっきの廃液を無公害化しよう」と、企業経営のかたわら大学院へ入学し、ついには世界初の「超臨界流体を利用した完全無排水のめっき法」を開発した。

「コア企業としての当社の仕事は、製品コンセプトと基本技術の提供。基本特許はもちろんウチのものです。が、開発段階で生まれた周辺特許も、連携企業と契約を結び、わが社にも権利が帰属するように知財戦略を練りました」

法(CBC法)やアルマイト加工^{※1}など、工業に不可欠な表面処理技術を提供するまでに成長した。

あるとき、この洗浄機を納入した工場で工作機械が発火した。洗浄機の中身は二酸化炭素だと思い出した工員が取り出して吹きかけると見事に鎮火。しかも、従来の消火器のように消火剤が残らないため後始末がいらす、生産ラインがすぐに復旧できたという。吉田氏は「消火器がつかれるのでは」とひらめいた。

特許技術を応用し、 開発メーカーに変貌。

「技術が画期的なだけでは売れない」と思い直した吉田氏は、消火機能にシートベルトカッターと車窓破砕機能を加えた「消棒RESCUE」を開発。自動車用緊急脱出のツールへと変貌させた。

自動車業界に売りこむと評判は良

※1 アルミニウム被膜の表面処理加工。 ※2 「異分野連携新事業分野開拓計画」の略。

く、ホンダが純正品に採用。日本グッドデザイン賞を受賞するなど認知度も上がり、売り上げが飛躍的に伸びた。

「特許技術をユーザーの用途にどう結びつけていくか、これを考えるのが知財戦略の次のステップですね」

自ら規格を作り出し、市場をリードする。

そして昨年、同社は、経済産業省が進める「新市場創造型標準化制度」に採択された。この制度は、先端技術や複数の業界にまたがる技術・製品に対し、従来、多くの時間を要した業界団体のコンセンサス形成を経ずに、迅速な国内標準（JIS）、国際標準（ISO・IEC）の提案を可能にするもの。「消極RESCUE」が基になった「自動車用緊急脱出支援用具」が国内標準化案件の第一号となったのだ。

「開発段階で分かっていたことですが、世に出回っている商品は性能が低いものが少なからずあった」という吉田氏。規格を設けることで、低品質品の排除が可能になり、製品力テゴリーの信頼性が高まるのに加え、自社製品の品質の高さが証明されブランド価値が向上。さらなる販路の拡大を見込むことができる。

「自分たちの技術や製品が業界の標準を形成し、市場をリードする。これが知財戦略のひとつの到達点ではないでしょうか」

技術やデザイン、ブランドなど、貴重な知財を守り、活用するための資金を備えませんか？

他社の参入を阻止して市場を守りつつ、独占的な地位を活用して新規事業を開発し、市場をさらに拡大する。知財戦略に使える資金を備える方法を考えましょう。



ぜひご覧ください

マンガで楽しく、分かりやすくご案内しています。

かんぽビジネスライブラリ
「知財戦略資金に活用」の巻

資料をご要望の皆さまへ

ご覧の資料をお届けします。
ご要望の方は、お手数ですが、かんぽ生命保険の最寄りの支店までご連絡ください。



がん治療最前線 標準治療の盲点



文=阿部博幸

医療法人社団博心厚生会アベ・腫瘍内科・クリニック理事長。臨床内科専門医、労働衛生コンサルタント。著書に『がんて死なない治療の選択』ほか多数。

3種の標準治療

がんの標準治療とは、手術、化学療法、放射線療法のうち、効果についてエビデンス(科学的根拠)があり、かつ健康保険診療に組み入れられている治療法です。

近年、がんの手術は患者さんの術後のQOL(生活の質)を考慮し、ほかの治療と組み合わせる縮小手術や温存手術を行う傾向があります。しかし、進行したがんになると臓器や組織を切除し、再建術を行うこともあります。また手術中の感染や出血、術後の肺炎などの合併症を抗生剤で予防する必要があります。

化学療法の抗がん剤は、がん細胞の増殖を阻止するものです。抗がん剤単独で完治をめざす以外にも、手術前がんを縮小させて切除箇所を少なくしたり、再発予防に使われたりします。薬剤を数種類

組み合わせ、効果を高める方法が主流になっています。さまざまな副作用をとまいますが、現在は副作用を抑える薬で症状を軽減しながら治療を受けられます。

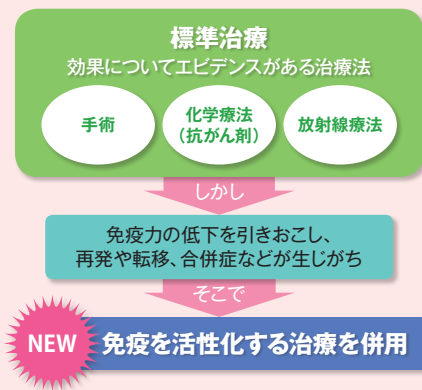
放射線療法は、がん細胞が分裂して増えるときに働く遺伝子に作用して、がんを消滅させます。副作用は治療部位によって異なりますが、一般的に疲労感、食欲不振、皮膚の赤み、吐き気、口内炎、脱毛、放射線肺炎などがみられます。最近、ピンポイントでがん細胞を照射する治療法で治療成績も向上しています。

免疫力低下という盲点

ここで知っておきたいのは、どの標準治療も患者さんの免疫機能を低下させることです。エビデンスがあるとはいえ、効果が高いだけに侵襲的な治療法でもあるのです。がんを退治できても、免疫力が低下

したために再発や転移、合併症で残念な結果を招くこともあります。

この標準治療の盲点に目を向け、標準治療に免疫を活性化させる治療を併用する新しいがん治療の時代が到来しつつあります。



(注) 記事中に記載の法令や制度等は取材当時のもので、将来変更されることがあります。詳細につきましては、各専門家にご相談いただきますようお願いいたします。